

伝えたい

まちの遺産

藤倉山と鍋倉山

— 神帰山光明聖寺遺跡 —

今庄の西には藤倉山(643m)、と鍋倉山(516m)があり、この両山の山麓にはかつて七堂伽藍があったといわれる神帰山光明聖寺の遺跡があります。白鳳・

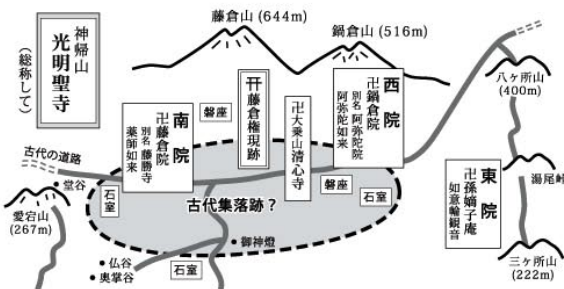
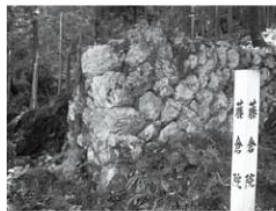
飛鳥時代に始まった門前集落が、光明聖寺を中心に存在したことが伝承されています。

近年、中高年の登山者が後を絶たない藤倉・鍋倉山ですが、尾根を通るハイキングコースの山腹にこの遺跡群があります。しかし、この遺跡を明らかにするものは少なく、湯尾に残る「日本大厄神三社権迹浅略記」に「藤倉之記」という古書があり、次のように記されています。

「醍醐天皇より延喜十五年乙亥(915)の夏に、神帰山光明聖寺の勅写を賜り第一院を総称して光明聖寺と名づけ、南院を藤倉院、又の名を藤勝寺とも称し、堂衆多し。さらに西院を鍋倉院と呼び又の名を阿弥陀院とも称し、東院を孫嫡子庵と称す。」

遺跡上に照らし合わせると、その場所が正方位でないとしても概要はほぼ納得できるものです。

また、かつて山麓内にあった清心寺の縁起には「往昔は藤倉山鍋倉院東照寺(藤勝寺)と言つ天台宗の大坊有之処、叡山より破却の由。今に鐘楼



(南越前町文化財保護委員 山蔭重遠)

跡谷々に堂谷、仏谷などと言つ字残り」とあり、何らかの理由により比叡山と決別し、このことが神帰山光明聖寺衰退のきっかけになり、現在の新道、今庄、湯尾地区への下山へと繋がっていったものと思われる。このように考えていくと、藤倉、鍋倉山は今庄の始まりと言えるかもしれません。

この藤倉山一帯は今庄から距離的にはそう離れていないにもかかわらず、登攀時間は結構かかります。毎年八月末頃の日曜日には、今庄壮年会がハイキングコース整備と遺跡の草刈を行っています。歴史に興味がある方は登ってみてはいかがでしょうか。今庄の始まりに出会えるかもしれません。

伝えたい

まちの遺産

古代の山林仏教寺院

— マンダラ寺遺跡 —

越前市と接する矢良集岳(四七二m)の中腹に位置するマンダラ寺遺跡は、地元では「オマンダラ」と呼ばれ、古くから土器などが出土する場所として知られていました。

昭和六十三年、マンダラ寺遺跡における最初の発掘調査が行われました。小規模な調査でしたが、人里離れた山中(標高四〇〇m)から平安時代の土器が出土したことで話題となり、遺跡の将来的な保存が検討されました。その後三回の発掘調査が行われ、平成八年には河野村の指定文化財(現在は南越前町指定文化財)になっています。

発掘では遺跡内の約三分の一を調査し、掘立柱建物とそれに関連する無数の柱穴が確認されました。柱穴の分布状況や密度からみると、一定の意図のもと正方位を意識し数回にわたり建て替えられた



可能性が高く、平坦地の山寄りに建物を配置し前庭部を広くつた寺院の伽藍形態とも考えられます。そのほかには、建物の縁辺で炭化物が堆積した土坑も確認されており、何らかの仏事に使用されたものと思われます。

出土した遺物はほとんどが須恵器で、大半が奈良・平安時代のもので、なかでも、仏教的な性格を窺わせる鉄鉢形土器、浄瓶、円面硯などが出土したことは、マンダラ寺遺跡が山中の仏教寺院であった可能性を強く示すものとなりました。

また、出土した土器のなかに「佐印」と記されたものがあります。同様の墨書が佐味氏の館と推定される越前市村国遺跡からも出土しており、越前の守や介、丹生郡の大領をつとめた佐味氏との関連が想定されます。マンダラ寺遺跡は、越前の国府推定地である越前市街や、国分寺に比定される大虫廃寺からも距離的に近いことから、国府や国分寺と密接な関係があったと推定されます。

以上ことから、マンダラ寺遺跡は奈良時代以降多くみられる山林仏教寺院で、教学の研さんや呪験力を身につけるための修行の場であったと考えられます。



鉄鉢形土器

伝えたい

まちの遺産

絶滅が心配される
ダーウインの申し子
ヤシャゲンゴロウ

ヤシャゲンゴロウの近縁種
のメスジゲンゴロウは福井
県より北に広く生息していま
す。ヤシャゲンゴロウ(本種)
はどうして夜叉ヶ池だけに生
息しているのでしょうか。

◎固有種の生じた謎

本種がこの池を唯一の住み家とした訳は、こ
の池が他の池と違った特殊な地形を含む環境条
件を持っていると考えられます。

本種は長い歴史を経てこの池に適應した独自の
生活を作り上げ、今日まで生き延び、独自の
進化を行ったと言えます。いわゆるダーウイン
の進化論の中の隔離による進化がこの身近な夜
叉ヶ池で生じたと考えられるのです。

本種が昆虫の進化を解明する鍵を握って今な
おこの夜叉ヶ池に生存していることは学術的に
大変貴重なことと言え
ます。

◎環境状況の悪化

長年夜叉ヶ池を観察
している人達の中で近
年ゲンゴロウの姿が少
なくなつたとの話を多
く耳にします。一部の
専門家によると、この
減少傾向は絶滅の危機



状態の警鐘であるとも言っています。

何故このような状況になったのでしょうか。
その原因の第一は、地球温暖化と酸
性雨によるもので、池の水温上昇が本種
の活動に直接悪影響を与えていること
と、幼虫期の餌となるミジンコの発生を
減少させたり、池全体の食物連鎖に異変
が生じていることが考えられています。

次に急激に増加した登山客による影響
も否定出来ません。登山靴で削られ、砕
かれ細かくなった土が降る雨で池に流れ
込み、池の生態系を大きく変化させてい
るのです。池周辺に木道を造り産卵場所
や土藪の踏み荒しは一応防げたものの泥
の流れ込みには歯止めがかけられないのが
現状です。

◎人工増殖の現状

平成十八年度より、町のご支援と地元
の人々の支援を受け、環境省・農林水産
省の請負業務として本種の人工増殖を実
施しています。基礎的な研究資料がなく
ゼ口からの出発は戸惑いも多く、試行錯
誤の連続です。一つ一つのデータを蓄
積し、近い将来には、人工増殖の技術を
完成し、夜叉ヶ池と山麓の飼育場の連携
により、本種が安定した環境で増殖出来
ることを目指しています。

この事業を通じて、南越前町から「人々
が創る動植物共存共生の自然界」のモデ
ルプランを発信したいものです。
(ヤシャゲンゴロウを育てる会)

会長 奥野 宏

伝えたい

まちの遺産

円宮寺の避難洞窟(河内)

一命の重さ、尊さに感じ入る
「人」ひとりの命の尊さ、
重さ。比して現代の命の粗
末さ、軽さは多くの人が感
じているところであろう。
我が身を無にして円宮寺良
観を守った河内の村人の庇護精神は、佛に帰
依した人だけに与えられた比類無き佛心の働
きであったことだと思っています。

◎円宮寺避難洞窟

天正三年(一五七五)八月、織田信長軍は大
群を率い越前に侵攻して、対峙する一向一揆勢
を粉砕し、またたく間に一国を平定した。杉津
口の守備についた円宮寺良観も、河内の善光坊、
干飯の善光坊を率い奮戦したものの敗れ、織田
軍の激しい残党狩りから逃れるため河内の洞窟
に身を隠し、やがて加賀へ亡命をへかった。

良観が避難した洞窟は、河内集落から約3km
山中に入ったところに存在する。洞窟の中は約
4mの広さがあり、高さも2m余りある。また、
南方から光が差し込み、北方からは水も流れて
おり、身を隠すには好条件の洞窟である。

◎ひたすら僧を守るための庇護の佛心

当時の河内区には、世帯四十四戸、人口
百二十人がいたらしい。織田勢は、円宮寺良観
の隠し場所を白状させるため一向一揆に同心し
た三人の村人を捕らえ、横を流れる河野川の堰
堤に逆さ吊りにし、繰り返す拷問を加えたとい
う。しかしながら、三人は命を絶たれるまでと
うとう白状しなかったという美談が今なお語り
継がれている。一方、洞窟に隠れた良観の所へ

は、二人の村人が食
糧を連日運んだと言
われている。その際、
洞窟へ行くときは草
鞋を逆さに履き、帰
りは正常に履いて、
山から外に出た足跡
しか残らないように
工夫したと伝えられ
ている。

いずれの村人も、僧に帰依し、佛を仰ぐの
と同じく僧を敬い、崇拝すらしていたのであ
ろう。当時に対し現代はどうだろう。あまり
に、人の命が軽すぎはしないか?感じ入る
ところ大であります。

現在、円宮寺の避難洞窟は町の文化財に指
定され、洞窟までの道も整備されており、一
度訪ねてみてはどうでしょうか。

(南越前町文化財保護委員 網田浩淳)



洞窟登山道案内図



伝えたい

まちの遺産

はねせ
羽根曾踊り

―我が町に残る盆踊り―

夏の風物詩のひとつである盆踊り。代々受け継がれてきたその唄と踊りには、その土地の風俗が素朴に表現され、「心のふるさと」がよみがえってきます。

【盆踊りの起源】

古くから受け継がれてきた盆踊りには、仏教行事に起源をもつものが多く、約千年前の平安時代、空也上人により始められた「念仏踊り」が祖霊祭などのお盆の行事と結びついていったといわれています。お寺の境内や広場にやぐらを立て、首頭取りの唄に合わせて周囲を回りながら踊るといった一般的な形式が定着したのは、室町時代頃（約六百年前）だといわれています。

【南越前町の盆踊り】

町内に残る代表的な盆踊りとしては、「今庄羽根曾踊り」と「上野羽根曾踊り」がありますが、それぞれに踊りの発祥や形態が異なっています。

「今庄羽根曾踊り」

は、現在の藤倉山の中腹にあった光明聖寺の仏前で奉納された稚児の舞が発端とされ、千年以上の歴史があります。テンプがおそくゆったり



と優雅な踊りは、古典

的な奉納の舞の名残りをとどめ、武士・僧侶・町人などいりどりの衣装で踊る様子は、江戸時代に宿場町として賑わった今庄の光景が思い浮かべられます。

一方、「上野羽根曾踊り」は、踊りのテンポがはやく活発で、踊りの輪が一気に活気づきます。毎年お盆には、上野区栄泉寺の境内で夜通し踊られますが、踊りの前奏曲ともいえる「どどら」という独特の唄とかけ声があり、唄いながら徐々に会場へと移動し輪になっていきます。村の暮らしや男女の心情が素朴に表現されており、村の娯楽とその結束を強める役割を果たしていたのでしよう。

【次世代に繋ぐべき「心のふるさと」】

これらの盆踊りは、現在も各保存会を中心とした熱心な普及活動により古い時代の姿を今に残し、地域のアイデンティティを育んできました。

社会や生活様式の変化により継承・活性化が難しくなっていますが、我々の先祖たちが、文字に頼らず体で記憶し伝えてきた伝統文化を变质・消滅させないよう守っていききたいものです。



来月の「街道浪漫今庄宿」に向け練習する子供たち(今庄羽根曾踊り保存会こども教室)